
エクストリーム・昔話

NEXCO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクストリーム・昔話

【Nコード】

N6793F

【作者名】

NEXCO

【あらすじ】

完全に気が狂った作者が昔話や童話を気まぐれで改造した気が狂ったようにしか見えない救いようのないコメディシリーズ。ただ今作者の都合により連載休止してたと思ったら復活したが、作者の都合により再び連載休止。再開予定……… 2月下旬

1 桃太郎（前書き）

この話で登場する団体、企業、国名は実在するものとは一切関係ありません。もちろんフィクションです。

1 桃太郎

これは昔々、江戸時代のような現代のようなお話。

あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでいました。

お爺さんは山へシバかれに（？）、お婆さんは川へ洗濯にいきました。

お婆さんが川で洗濯をしていると、上流からどんぶらこ、どんぶらことお爺さんの死体が流れて来ました。

お婆さんはお爺さんの死体を拾って中身を調べると、中から元気な男の子が産まれました。

お婆さんはその子を桃太郎と名付けました。

果たしてお爺さんは男だったのか。今でも学者の間で議論が巻き起こっているようです。

お婆さんは少ない年金をやりくりしながら、桃太郎を大切に育てました。

桃太郎も安っぽい食事にも文句を言わず、普通にすくすくと成長しました。

高校を卒業した桃太郎はその家計の苦しさから大学進学を諦め、S
。NYに就職しました。
しかし、サブプライムローンに始まった世界的な経済の落ち込みの
影響を受け、桃太郎は数年間勤めていたS。NYを辞めなければな
りませんでした。

失職のショックから妄想癖になってしまった桃太郎は、突然
「俺は鬼を倒す」などと言い、勝手に佐渡へ旅立ちました。

途中で車、漁船、漁師を仲間にした桃太郎でしたが、
車は佐渡に持ち込めず途中で捨て、漁船と漁師はそれぞれの生活が
掛かっているので手放し、結局一人で旅をしていました。

佐渡に着いた桃太郎でしたがS。NYがあるということはやはり時代は平成。鬼などいるはずありません。

桃太郎は家に帰ろうとしましたがその途中、北。鮮に拉致されてしまいました。

桃太郎の運命やいかに！？

桃太郎が目覚ますとそこはピョンヤン。
夢オチなんてそんな甘い世界はありません。

桃太郎はS。NYに勤めていたころに身に着けた半導体製造技術を
某総書記に伝授。

そして北。鮮国内に半導体工場を建てた桃太郎は大儲け。
それもそのはず。幸い北。鮮は最低賃金が低かったため、利益が大きかったのです。

そして財力で北。鮮を乗っ取った桃太郎はその後朝。半島を統一。
「伝説の將軍様」と呼ばれ、後の世に名を残したのでした。

結局、お婆さんはほったらかし、お爺さんは序盤で死亡ということ
で桃太郎一人でハッピーエンドでした。

E n d

1 桃太郎（後書き）

この話、果たして続けていいのでしょうか……。思いつき次第更新して行きます。

連載で、「俺が私で私が俺で……」も投稿しておりますので、そちらもどうぞ。

ではまた。今後ともこの意味不明な作者とシリーズをよろしく願います。

2 浦島太郎（前書き）

このシリーズはひたすらテキストに話を改造するものなのでご了承を・・・

2 浦島太郎

昔々、あるところに、浦島太郎という人物がいました。

ある日浦島が気晴らしに西表島の海岸を歩いていると、砂浜に亀がいました。

と、そこまでは良かったのですが、突然どこからともなくヤンキーが現われて、亀をいじめ始めました。

浦島は亀を助けようとして、ヤンキーにケンカを売りました。

「てめえら何イジメてんじゃコラア」

すると、ヤンキーは予想以上に弱虫だったらしく、散り散りになると逃げて行きました。

そして浦島は亀に駆け寄り、こういいました。

「せっかく助けたんで、なんかお礼下さい」

亀は浦島の傲慢さに当初びっくりして、しばらく答えに詰まりましたが、何か思い付いたように、

「竜宮城、来る？」

と言いました。

浦島は暇だったので快く了承し、酸素ボンベを装備して竜宮城へ向かいました。

竜宮城に着いた浦島は、特に出迎えも受けずに中に入り、どこからともなくやってきた豪華な食事に舌鼓を打っていました。

するとこれまたどこからともなく二つ宝箱が運ばれてきて、どちらかを選んで持っていけと浦島は言われました。

浦島は童話以上に欲深い人間だったので、どうせだからと両方持ち帰り、疲れて早く帰りたかったので急行で家に帰りました。

家に帰った浦島は特に宝箱を開けるなとも言われていなかったのので普通に開けました。

大きな箱を開けると、その中にはお土産のイリオモテヤマネコが。竜宮城優しいな〜と思いながら小さな箱を開けると、その中には二枚の紙が。

「ん、請求書と……逮捕状!？」

イリオモテヤマネコを捕獲するのは犯罪です!!!

皆さん、自然は大切に!!!

E
n
d

2 浦島太郎（後書き）

続く可能性もあります。

3 うさぎとかめ(前書き)

久しぶりの更新です。もはや崩壊気味のシリーズですが、気分が向
き次第更新していきます。多分

3 うさぎとかめ

昔々、あるところ、多分ヨーロッパあたりに、うさぎとかめがいました。

紆余曲折あって、うさぎとかめはフルマラソンをすることになりました。

〈某どっかの陸上競技場〉

アナウンサー的な人「さあ、今スタートしました。
コカ。ーラプレゼンツ、ヨーロッパフルマラソン。

まず先頭に立ったのはうさぎ。どんどんと引き離して行きます」

うさぎはスタート直後猛ダッシュでかめを引き離しました。

かめは元々陸上では大して速く走れない生き物なので、うさぎにどんどんと差をつけられる展開になりました。

うさぎはどんどんと差を広げていきます。途中で油断したうさぎは、道沿いにあった木陰でしばらく休憩することにしました。

一方、努力を続け一歩一歩進むかめでしたがあまりにもスピードが違いすぎます。もはや勝利を諦めかけていました。

1日が経ちました。うさぎはまだ休憩しています。かめはまだ追いつきません。見物客は飽きて帰っていきました。

3日が経ち、やっとかめがうさぎに追いつきました。

かめがうさぎを見ると、うさぎは憔悴しきった顔でかめを見ていました。

かめ「あれ、勝負は？」

うさぎ「もう………帰ろうよ」

かめ「………そうだね」

うさぎも待ちくたびていましたし、かめも疲労が限界に達して
いました。もうレースを続ける気も起きません。

二人は帰りに銭湯でも寄ろうかと話しながら、帰って行きました。

うさぎとかめがレースをするなんて、そんな無謀なことはしてはい
けないのです。
時間の無駄です。

そう思った二人………いや、二匹？でした。

End

3 うさぎとかめ（後書き）

昔話ほど不条理なものはないなーと思う作者でした。

4 赤ずきん（前書き）

久しぶりに更新しました。これからも時々更新していきますのでその時はよろしくお願いします。

4 赤ずきん

それはある日のこと。

赤ずきんの保護者と思われる女性は赤ずきんに向かって言いました。

「赤ずきんや、おばあさんのお見舞いに行つてあげなさい」

そういつと赤ずきんの保護者は、赤ずきんにブランデーや松坂牛など、どう見てもお見舞いとは思えないような代物を渡しました。

(こいつ、ばあさん殺す気がよ……………)

赤ずきんはそんなことを考えましたが、反論するとお小遣いを減らされてしまったため、そのまま出発することにしました。

「セバスチャン、車の用意を」

赤ずきんがそう言うと、セバスチャンと呼ばれた、いかにも執事のような身なりの男が出てきました。

執事ですから。そりゃ執事のような身なりですよ。

「はい、お嬢様」

そういつとセバスチャンは赤ずきんを玄関へ連れて行き、用意されていたロールスロイスに乗せました。

赤ずきんが出発すると、セバスチャンは悪者っぽい微笑みを見せ、家の中に入ってゆきました。

赤ずきんを乗せたロールスロイスはぐんぐん加速し、やがておばあさんが住んでいる森の中に入って行きました。

途中赤ずきんはキレイな花を見つけ、おばあさんにあげようかと思いましたが、あまりにも車のスピードが速すぎてすぐに花は見えなくなっていました。

そうこうしてるうちに赤ずきんを乗せたロールスロイスは、おばあさんの家に着きました。

赤ずきんがおばあさんの家に着くと、家の前にメイドが勢揃いしていました。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

（別に帰ったわけじゃないんだけど）

赤ずきんはそう思いながら家の中へ入ってゆきました。

赤ずきんがおばあさんの部屋に着いたのは10分後。おばあさんが暮らしている家は初代当主の邸宅だったので、広さは東京ドームに

匹敵するほどあったので、赤ずきんはおばあさんの部屋に着くまでに疲労してしまいました。

赤ずきんがおばあさんの部屋に入ると、そこにはおばあさんの格好をした狼が眠っていました。

狼は完璧な変装をしているつもりでしたが、赤ずきんにはバレバレでした。

しかし赤ずきんはわざと騙されていつか童話で見たような質問を試みることにしました。

「えーと、おばあさんや」

「なんじゃい……いや、なに？」

「なんでおばあさんの耳はそんなに大きいの？」

「それはね、最新鋭のサ라운드システムも漏れなく聞き取るためなんだよ。

べ、別に赤ずきんの声が聞きたいからなんかじゃないんだからねっ
！！」

（ツンデレかつつーの。狼のくせしやがって）

赤ずきんは早速めんどくさくなってきましたが、しばらく質問を続けることにしました。

「おばあさんの目は、なんでそんなに大きいの？」

「それはね、大画面の液晶テレビを見るためなんだよ」

（家電好きだな……）

赤ずきんはそう思いつつ、さらに質問を続けました。

「おばあさんの鼻は、なんでそんなに大きいの？」

「それはね、空気をたくさん吸うためなんだよ」

「おばあさんの手はなんでそんなに大きいの？」

「遺伝。」

（あ…そうすか……）

「今回のゲストは赤ずきんのおばあさんに扮する狼さんでしたー」

「口のこと聞けよ！てかバレてたんかい！！」

「じゃみんな、やっちなえ」

赤ずきんがそう言うと、部屋の周りにいたガードマンが一斉に狼を
押さえ付け、リンチしてやりました。

「あ、おばあさん助けるの忘れてた……………」

その後おばあさんは無事助けられ、余った狼はスタッフがおいしくいただきました。

その頃、家の前を通り掛かった猟師は……………
「あれ？俺の出番無かったっけ？」

完

4 赤ずきん（後書き）

感想？意見？頂ければ嬉しいですね。

というわけで感想等を書いて頂ける慈悲深い皆さんはよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6793f/>

エクストリーム・昔話

2010年10月14日17時09分発行